

「谷中リボン・渡辺四郎コレクション」のその後

権上かおる・山崎範子（谷中のご屋根会）

このたび東京家政大学博物館（東京都板橋区）

に明治・大正期の国内外のリボン見本帳および渡辺四郎が収集した、繊維産業にかかわる洋書（含む渡辺四郎の東京職工学校（蔵前・機械）時代と思われるノート）が、収蔵される運びとなった。ここまで来られたのは、多くの皆様、なかでも専門分野では産業遺産学会の方々のご協力のおかげと紙面をいただき経過を報告したい。収蔵は2021年3月の予定である。

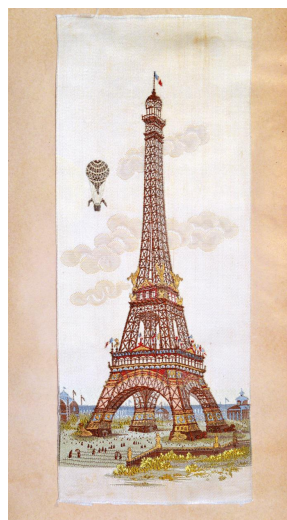
2013年、JR山手線日暮里駅から徒歩5分の商店街に面したのこぎり屋根建物が解体された。1894(明治27)年の建築と推定され、ランドマークとして町の人々に愛されていた。建築部材の一部を保存したことがきっかけとなり、翌年、関連建屋の解体時に保存されていた明治からの絹リボン見本帳などが、所有者から当会に譲渡された。経年劣化の激しかるべき絹のリボンが当時のままといい状態であった。これは、分厚い板厚の木製書棚の中でほとんど開けられることなく保管されていたため、絹にとっては良好な保存状態であった。工場は戦災にも遭ったが、資料は奇跡的に焼失を免れたのである。

展覧会のテーマを変えて約5年の間に4回開

き、町の人々への公開と同時にカンパもいただいた。これをもとに、保存した部材、資料は、当面の手当てはできたものの恒常的な対応が必要なことは明らかであった。

筆者らは、当学会へ入会し、リボンの産業遺産的な価値を知りたく学会発表・論文投稿を行い、繊維にかかわっていた皆さんからのアドバイスを得た。同時に掲載学会誌を地元自治体の台東区や文化財関係機関、服飾関係の大学、現在のリボン企業などへ送り、収蔵の可能性を探った。

同じく譲渡されたのこぎり屋根部材の一部については、学会からも保存要請文を提出いただいたが、現在も活用の道は開けていない。



パリ万博の土産物 絹リボン
(筆者撮影)

リボン見本帳は、本来の用途である髪飾りや

服飾用もちろんあるが、写真・印刷の発達していない1800年代後半には、リボンがその役割を果たしていることがよくわかる。ミラノ大聖堂、キリスト教関係、肖像画、パリ万博など多くの人にその姿かたちを伝える手段であった。

筆者らがみても精緻な織であることがわかるが、ぜひ専門の方にみていただきたい思いが強いところへ、東京産業考古学会の講演会で新井正直氏（織物研究家）と出会い、調査を引き受けていただいた。氏は、「リボンの調査は現在続行中で、やはり素晴らしい見本帳です。1点ごとに引き込まれていて、まだまだ時間がかかりそうです。日々新たな発見をしています」と述べている。

このご報告実現への多くの方々のご協力に感謝し、特に名前を記して、東京家政大学博物館、玉川寛治氏、新井正直氏に謝辞を表す。

権上かおる、山崎範子、菊池京子、真鍋雅信、吉田喜一

「東京台東区谷中細幅織物工場所有リボン現品調査」

（産業考古学会全国大会発表 2015年）

同「欧化主義の中心地、東京の明治のリボン産業」

（『産業考古学』第153号、2016年）

同「東京台東区谷中細幅織物工場操業状況と見本帳などの保存活動について」（産業考古学会全国大会発表、2018年）

